



中野 祥三郎

キックマン  
取締役常務執行役員

経済同友会 つながる▶▶

## リレートーク #230



北原 義一

三井不動産  
取締役副社長執行役員

# 1964 vs. 2020

アベベ、円谷幸吉、東洋の魔女、ショランダー、ヘイズ、三宅義信、小野喬、ヘーシンク、チャスラフスカ……。

1964年の東京オリンピック。私はまだ7歳だったが、今でも当時の名選手の名前が、つらつらと浮かんでくる。特にマラソンの円谷選手が競技場に入ってきた場面では、アベベに次いで2番手を激走していたにもかかわらず、トラックで英国のヒートリーに抜かれ、悔しくて涙が溢れたことを思い出す。

1964年のオリンピックは、日本の奇跡的な戦後復興を世界に示す、またとない機会であった。そしてそれは、新幹線やカラーテレビとともに、日本という国と日本人の新たな表情を見事に表現することに成功した大会でもあった。

次の2020年東京大会は、どうあるべきか？

GDP世界第3位、アジアで唯一のG7加盟国、押しも押されもしない世界の最先進国、日本。その国の首都東京で開催されるオリンピック・パラリンピックである。1964年のそれとは明らかに国の立ち位置が異なる。また異ならなければならない。

今から120有余年前。帝国主義がまん延していた時代背景の中で、スポーツと文化を通じた人々の国際交流と世界平和への希求が、クーベルタン男爵の目指した近代オリンピック精神であった。競技はあくまで個人および団体同士のもので、決して国家間の戦いではなく、いわんやメダル獲得競争でもなかった。

保護主義、ブロック経済化の足音、相次ぐテロ、金融偏重資本主義のまん延。それによる目に余る経済格差の肥大化等々、世界が極めて情緒不安定に陥りつつある今こそ、クーベルタン男爵がそうしたように、われわれ日本人は2020年東京大会をフックに、平和のメッセージを世界に発信していく責務がある。

2020年東京大会のレガシーは「平和の希求、平和の実現」であるべきだ。戦後70年を経て、平和を堅持してきた日本だからこそ、それをうたう資格がある。2020年東京大会を一過性の壮大なイベントに終わらせることなく、オリンピック・パラリンピックというスポーツの祭典を通じて、国際相互理解を深めていけることを心から望んでいる。

▶▶ 次回リレートーク

鳥海 智絵

野村信託銀行  
執行役社長